

---

# 虹色の宝物

夢贈人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹色の宝物

### 【Nコード】

N4862A

### 【作者名】

夢贈人

### 【あらすじ】

主人公であるレン、そしてアレスの二人はさらわれたココロミを取り戻すために三つの「虹色の宝物」を探す旅をしている。虹色の翼、虹色の薔薇、虹色の指輪、三つのガラス細工を揃えれば強力な魔法が使えるのだ。      リレーにつき、展開不明！

## 第一話

真夜中過ぎ。外灯に照らされた石畳の道に、低く靴音が響いた。そこは、外灯以外は何も無く広々としているのだが、真夜中と言うこともあつて狭苦しく感じる。

天空で淡く光っている月は、いまは雲に邪魔されてその姿を隠していた。

ここが辺境の地ならば、いつ盗賊や獣が襲い掛かってきてもおかしくはない。だが、ここは王都。そのような心配は無用だろう。

靴音は、ゆっくりと慌てる様子もなく、夜の静寂に響き渡る。黒いフードをすっぽりと被った、小さな華奢な影。その歩みが、不意に止まった。

小さな影の主は、おもむろにフードを外す。その時、雲に隠れていた月が顔を出し、地上に淡い光りを投げかけ、年端のいかない少年の顔を映し出す。

「もうすぐ、彼奴が現れる頃だな。だが、それにしても……」

王都の中心部から離れた場所であるが、妙に静か過ぎる。いや、気配がないというのだろうか……。一抹の不安がよぎった。

不安を覚えながらも、刹那上空へと飛躍。外灯の頂に微かな音を発てて、立った。暗闇に溶け込んだフードをそのままに、ズボンのポケットに手を突っ込む。

「二人……いや、三人か」

少年は透き通るようなソプラノでそうつぶやくと、自分の置かれた状況に冷静に対応した。どうやら、彼の命を狙うものが現れたようである。

彼を狙っている相手は単体でしか行動しないはずだ。複数の気配がしたということは、恐らく彼奴とは別口。

「難儀なことだ」

そう呟くと同時に、飛来した投げナイフを叩き落とす。

ナイフの落ちる僅かな金属音が、静かな石畳に木霊する。

「おや、おや、困っているようだね」

少年が、石畳に落ちたナイフに目を落としていると、上空から声が聞こえた。

その声の主は、少年を見下していた。彼は自然と、背筋に緊張を覚える。

「別に。困ってはいない。こんな物騒なモノを、問答無用で投げ付ける奴らには、どんな礼が良いかと考えていただけだ」

声の主を鋭く睨め付けると、少年は、まるで天使の様な微笑みを浮かべた。

「まあ、そう言わず。私の背に乗りなさい。またナイフが飛んでくる前に」

彼、大鷲はそう言い、広い羽を広げて少年の近くに舞い降りて来た。

少年は大鷲のことを暫し見つめていた。手は腰にあるレイピアにかかっている。警戒を解かない少年。しかし大鷲は動じることもなく、再び語りかけた。

「さあ、早く。新しい追っ手が来たようだ」

大鷲の言葉に、少年は外灯の上から下を覗く。薄い月明かりを通して新たな敵の影が見えた。さっきの連中の倍の数はいそくだ。

「よし、分かった。では任せるぞ！」

追っ手の方を見ながら、少年は応えた。そして、直ぐさま大鷲の背に飛び乗った。

少年が乗ったのを確認して、大鷲は素早く、空へ大きく羽ばたいた。

大鷲は、ぐんぐんと高度を上げて行く。

振り落とされないように掴まる少年の、黒いフードが風にはためきめくり上がる。淡い月明かりの下現れたのは、金色に輝く頭髪とその瞳

「ほう　まるで、トパーズだな」

大鷲が、愉快そうに笑った。

「見えるのか？」

少年は、背に乗っているにも関わらず瞳の色を当てた大鷲に対してそう尋ねた。

「見えるさ。私の目は全てを見通す。見えないものといったら、そう　心の中くらいか」

「心の中か……」

少年は呟き、視線を暗闇の中に漂わせる。

「僕は一度心を読める人物に会ったことがある。あの人は魔法を使って人の頃を読みとった」

「それは興味の沸く話だ。どうだ、この老いぼれに一つ聞かせる気はないか」

「老いぼれなのか？」

「不老不死ってやつだ。何百年も生きていれば、老いぼれも若いもなにも」

「そうか……」

魔法、それは太古の昔に滅び去った古代魔法王国の大いなる遺産である。だがいまでは、資料も少なくそうやすやすと魔法を扱える人間はいない。

少年はその美しい瞳を閉じ、静かに追憶の彼方へと思考をめぐらせた。

「あの人　、あの人は僕が唯一出遭った、否、出遭う事のできた魔導師……。あの人は、僕の心を読んだ。その時、酷く冷たい目で言っただんだ」

「何と？」

大鷲の質疑に、一拍おいてから少年は応える。

「　自分自身を信じていない。だから……、お前は弱いんだと。鮮明に覚えてるよ」

「自分を信じること……何百年も生きている私でも、時に自分を信じられぬこともある」

大鷲は笑うかのように、くちばしを軽く開いた。

「若いお前には無理もないことだ」

少年を乗せた大鷲は大きく旋回すると、ゆっくりと山の頂に降りていった。

「……さて、ここなら追っ手はすぐには来るまい」

「恩にきる。ところで 聞いても構わないか」

大鷲は振り向いた。

「なんだね」

「貴方は……一体何者だ？」

「残念だが、答える事はできない」

怪訝そうな表情で、何故、と大鷲に問う少年。

「……お前に息災を……。……では」

大鷲は巨大な翼を広げ、上昇していった。

## 第二話

不吉な言葉を残して飛び去った大鷲を見送り、少年は改めて周囲を見渡した。予想はしていたが、小屋の一つも見当たらない。

「狙っていた賞金首を見つけることもできず、得体の知れない連中に襲われて、人里離れた山中へ。さて、これからどうすべきか」

幸いな事に2、3食分の食料は携帯している。これからどうするべきか、少年は近くの木の幹にもたれかかって思考作業に入った。

少年は木の幹にもたれ掛かり、簡単な食事を済ませると、黒マントを毛布代わりに羽織った。

「疲れた……」

とりあえず一眠りして考えよう……。少年は闇に紛れるように黒マントを頭までかぶり眠りについた。

夜明けまではまだ多少の時間があつた。少年は警戒していたが、目を閉じるとすぐに泥のように眠り込んでしまった。

ガサガサ……。

草がざわめく音。だが少年は目を覚まさなかった。

草の陰から、幾つもの影が姿を現した。いずれも闇には紛れそうにない、深紅の衣。

いたぞ。

ビンゴ、だな。

それは小声で言葉を交わす。

深紅の衣をまとった一人の男が、足音を忍ばせて少年の背後に回る。そして、手にしていた布きれを素早く少年の鼻と口にあてがつた。

「うう……」

熟睡していた少年は抵抗する間もなく、眠りより深い闇の底に意識を落とした。

「死にやしないか？」

ぐったりした少年を見て、他の一人が言う。

「何、大丈夫さ。良く効く眠り薬だ」

男は低く言い、少年を抱きかかえた。

と、その時だった。

「ちょっと待ちな！」

あらぬほうから男の声が聞こえた。

深紅の衣をまとった一団は、咄嗟に警戒態勢を取る。

「何者だ！」

一団のリーダーらしき男が闇に向かって誰何<sup>すいか</sup>した。

闇の中から、長身でスリリとした若者が現れた。彼は、少年と同じ黒いマントを羽織っている。

「街道で待っていると思ったら、こんな山奥で眠っているとはな」

若者は、深紅の衣の背に抱えられている少年に目をやり呟いた。

「貴様、何者だ」

もう一度、リーダーらしき男が尋ねた。

「おまえらに名乗る名など……ない！」

若者は言葉と一緒に、電光の速さで剣を抜き放ち、少年を抱えている男の身体を両断した。

「返してもらっぞ」

そう言って、若者は少年を軽々と抱き、一団にたいして凄惨な笑みを浮かべた。

「行け！ 殺つてしまえ！」

リーダーらしき男は、部下を鼓舞する。

「男は、殺して構わん。必要なのは、子供の方だけだ」

「臆するな！ 向こうは、たった一人だ。行けっ！！」

淡い月に照らされた闇の中、深紅の衣が一斉に動き出した。

深紅の一団は、皆が同じような武装をしていた。硬い皮製の鎧にロング・ソード。粗末ながらもそれぞれ使い込まれているようだった。

「愚かな」



若者は悪態を吐くと、少年を静かに地面に下ろし、すばやく体制を整えた。

深紅の衣の一団は、ササツと若者の周りを取り囲んだ。

「命を粗末にするな……」

若者はフツと片方の口角を上げて低く笑い、闇に向かって剣を振りかざした。僅かな月明かりがキラリと鋭い剣を映し出す。

「かれ！」

深紅の一団は若者めがけて一斉に殺到した。

だが……若者の振るう剣は、まるで何の抵抗もないように滑らかに、そして素早い動きで一人またひとりと敵を屠っていった。それと同時に若者の動きも絶妙な間合いで相手の剣戟をかわす。それはまるで優雅な舞を思わせた。

若者は血飛沫をまかわす見事な動きで相手を翻弄し、終始戦いの主導権を握っていた。

気がつけば、いつの間にか深紅の衣が地面に散乱していた。

「……なんだ終わりか。情けない」

彼は心底残念そうな顔をして小さく呟いた。その呟きは闇に溶けていく。

やがて、闇が徐々に明るくなってきた頃、少年は目を覚ました。そして、自分が誰かに寄りかかっていたことをはじめて知った。

「君か」

少年は若者にそう言葉をかけた。

「まったく、何でこんなところにいるんだ。俺がいなかったらいまごろ……」

「ゴメン」

「しょうがねえなあ」

若者は少年の言葉にやわらかい笑みを浮かべた。

少年は立ち上がり、大きく伸びをして朝の冷たい空気を吸い込んだ。

「僕がここにすることが何故分かった？」

「大驚だ」

若者は少年を見上げて言う。

「大驚がお前を乗せて飛んでいる姿が見えた」

「貴方の視力は一体いくつなんだ？」

少年は首を傾げて言った。

若者は苦笑した。

「夜目が利くんだ」

「ところで、例の物は手に入ったのかい？」

「もちろんさ」

若者はそう云うと、懷から小さな革の袋を取り出した。

「苦労したぜ、なにせ魔法の品だからな」

若者はニヤリと笑う顔を少年に見せ、その品物を懷から取り出す。

「これだ。本当に苦労した甲斐があったよ」

若者は、自分の顔の前でそれを見ながら満足気に言った。

「虹色の翼……」

少年は、クリスタルの小さな翼を見つめる。それは、鳥が羽を広げて空を舞っているような形をしている。クリスタルの羽に朝日が降り注ぐと、キラキラと七色に輝いた。

「これで、呪いが解ける……」

少年はつぶやいた。

「まだほかにも必要なものがあるけどな」

若者はいつになく真剣な表情で言った。

「……呪いが解けることは、嬉しいけど……」

少年も、若者と同じ類の表情を浮かべた。

「ん？」

「あいつは 大丈夫なのか……？ 生きているのか？ 例え虹色の翼を手に入れたとしても、あいつが ココロミが無事じゃないと意味が無い。どうなんだ……？ あいつは 」「

少年は悲痛な表情で若者を見た。

その瞳には輝くものがあつた。

「大丈夫だ。きっと……」

若者は幼子をあやすような口調で言った。

「おまえが信じてやらないでどうする？」

「うん」

少年はあふれた涙をぬぐいながら、若者に心の中で礼を言った。

（ありがとう）

## 第二話（後書き）

今回の執筆は、香川不動、春野天使、斎藤京享、三竹和沙、堇、零  
崎出織、水樹裕の七名です。

### 第三話

呪いを解くのに必要な物は、虹色の翼、虹色の薔薇、虹色の指輪。どれも小さなクリスタルの形をしていると聞いた。それを揃えれば呪いは解ける。

「レン、そろそろ帰ろうか。仲間達が待っている」

若者はレンという名の少年に言った。

「ああ。早く皆に会いたい」

レンは、懐かしさを込めた口調で言った。

それに対して若者は、苦笑をまじえて答える。

「そうだな。俺には会いたくない奴もいるんだがな。まあ、あいつが今何をしているのかって事は知らないけど。じゃ、行こう！」

二人は朝の光を浴びながら、街道へ続く道へと歩き出した。

残る魔法の宝物はあと二つ。

それを手に入れるのは至難の業だが、あきらめるわけにはいかない。

そんな二人を遠くから見つめる人物がいた。

だが、その人物が二人の前に姿をあらわすのは、もう少し先のことだった。

「ねえ、僕のお宝買つていかない？」

山道を下り、町外れの平坦な道を歩く二人の前に、突然小さな男の子が走り寄ってきた。クルクルとカールした巻き毛、そばかすのほっぺに笑みを浮かべて、男の子は両手を差し上げる。その手の中にはクリスタルのガラス細工の品々が乗っていた。

二人は子供の手の上にある品物を注意深く見つめた。

「まさか……」

レンが半ば呆けたような顔で若者を見る。

「まさか、な……」

少年もレンの顔を見た。

「きれいでしょ？ 買つてよ」

小さな男の子は腕を伸ばしたまま、レンと若者の顔を代わる代わる見つめる。ガラス細工は猫や馬や林檎の形をしていた。

「薔薇の形のクリスタルはある？」

男の子の手の平に乗っているガラス細工を眺めながら、レンは聞いてみた。

「薔薇の？ ここにはないけど……あ、そうだ！」

何かを思い出したのか、男の子が持っていたガラス細工を地面に置いて指を指した。

「ここから向こうへずーつと行くと、廃墟になった神殿みたいな所があるんだ。このガラス細工はそこから持ってきたんだけど……確か、そこに薔薇の形があつたと思うよ」

北東を見据えながら、男の子は言った。

「そう。ありがとう」

レンはそう言つてさっさと歩き出す。置いてけぼりを被つた若者はすぐに追いついて、

「おい、行くのか？」

「当然」

若者は溜め息をついた。

（どこまで自由奔放なんだ……？）

なだらかな丘の上に、廃墟となつた神殿は建っていた。古代ギリシャの神殿跡のような、大きな白い柱が並んだ廃墟だった。柱の何本かは崩れ、半分になつた柱がむき出しになっていた。

「ここどこにガラス細工が？」

レンは神殿の前に立ち、辺りを見回した。

「あの子供を信じるのか？」

レンの後ろで、若者は尋ねた。

「……信じるほかないよ。他に手掛かりはないんだし」

レンは、神殿の中に足を踏み入れながら応えた。

若者は、「お前らしいな」と言いながら、レンの後に続く。

足元には、崩れた柱や石壁の残骸が散らばっている。

「おい、気を付けろよ」

若者が言い終わらないうちに、レンは残骸に足をとられる。

「わっ！」

大きな音とともに、レンはその場に転んだ。

「つたく、慌て者だな。もう少し状況を判断」

レンを助け起こそうとした若者も、バランスを崩しかけると、どこかからクスクスという笑い声が聞こえてきた。

二人はその笑い声がする方向を見た。

「あ！ おまえ」

若者はそこに、先ほどの子供の姿を見た。

「あーおかしい！ こんなに面白いこと、やめられないよー」

子供は二人を見てまたクスクスと笑いだした。

「騙される大人を見るのって楽しいー」

「大人ねえ……」

若者は呟いて脇で未だ立ち上がらないレンを見る。

「なに？」

「いや、別に」

「ここにガラス細工があるって嘘だったのかい？」

マントに付いた汚れを叩きながら、レンは立ち上がる。

「ウソに決まってるよ。こんな所にガラス細工なんかあるわけないじゃん。ガラス細工はボクの家で作ってるんだよ」

子供はケラケラ笑いながら答える。

「家で？ ……まあわかりきったことだったが、ハズレだったな」

若者が皮肉を込めてレンに言った。

「そんな簡単に見つかるはずないだろ。藁にも縋りたい気持ちはわかるけどな」

「どっちにしろ、確かめなきゃいけないじゃないか」

レンの投げやりな言葉に、若者が真顔で答えた。

「お前、あと……いや、今まで何回騙された？」

「……………にじゅうななかい」

「二十七回って……数えていたのか？」

「おじさん達面白い！ ボク、二ノって言うんだ。家に遊びにおいでよ。もっとたくさんガラス細工見せてあげる。父ちゃんと姉ちゃんも紹介するから」

二ノはまだ笑い転げながら言った。

「俺はアレスで、こいつがレン。オイ、おじさんはないだろ。俺はまだ二十三歳だ」

「ウソだ」

そう言って二ノはいたずらっ子のように舌を出したかと思うと、またクスクス笑いだした。

「あ・の・なあ〜！」

「まあまあ、そう興奮しないで……プツ」

レンはアレスをなだめようとしたが、思わず吹き出してしまった。

「レ・ンツ〜！」

「ごめんごめん、そう言うわけじゃないんだけど、なんだかこんなほのぼのとした雰囲気、久しぶりだから……」

そう言ってレンは柔らかな微笑を浮かべた。

「そうだな」

アレスもフツと笑う。思えば敵との戦い続きで、こんなにリラックスした時を過ごす機会はほとんどなかった。ほんの少しの間でも、平和で温かな時間の中に身を委ねていたいと思う。

「ねえ、レンは何歳？」

二ノがレンを見上げて聞く。

「十四歳」

「へえ〜じゃ、ミーナ姉ちゃんと同年だね」

「いい友達ができたな」

アレスはレンに笑いかけた。

「うん……」

レンははにかむように微笑する。



「腹減ったぜ！」

「じゃあ、おいでよー」

二ノはびよんぴよん跳ねるように二人を先導した。

「おう！飯食わせてくれよ」

アレスは豪快に笑いながら二ノのあとについて歩き出した。

### 第三話（後書き）

今回は、春野天使、零崎出織、三竹和沙、斎藤京享、堇、カタリヤの六名の執筆でした

## 第四話

ニノの家は、まるで彼の性格を表していた。

せわしく料理を運び、動き回るのは姉のミーナ。父親のルークは、レンとアレスの二人を、見知らぬ人間であるにもかかわらず歓迎してくれた。

「ルークさん、ガラス細工を見せて貰えますか？」

ミーナの手料理をお腹いっぱい御馳走になった後、レンが聞いた。「おう、いくらでも見せてやるよ。毎日、娘と丹誠込めて作っている自慢の品々だ」

「ガラスのデザインは私が決めているのよ。このグラスだって私の描いた絵だから」

食器の片付けをしていたミーナは、レンが飲んでいた空のグラスを手にとると、ポンとトレイの上に置いた。ミーナは栗色の長い巻き毛を一つに束ねた陽気な少女だ。ココロミとは随分タイプが違うな、とレンは思う。

「どうかした？ ぼーっとして」

ミーナがレンに声をかけた。

「え？ あ、いや別に」

レンは、慌ててごまかしたが、顔は真っ赤になっている。そんなレンを見て、隣にいるアレスはニヤッと笑っている。

「こりや大変だ」

アレスが笑いながら言った。

「な、何が大変なのさ」

レンはより一層、顔を赤くして抗議した。

「いやいや、オレはなにも見てないし聞いてない」

アレスのとぼけた顔に、レンは抵抗を諦めた。

「勝手に言ってる！」

「ちよっと、ガラス細工を見に行くんでしょ？ さっさと行ってく

れない？ お皿を洗わなきゃいけないんだから」

ミーナはレンとアレスの前から空の皿を取って、ガチャガチャとトレイに乗せる。

「二ノ、あんたも手伝いなさいよ」

ミーナは、まだミルクを飲んでいる二ノに言った。

「姉さんが怒ると、雷より怖いんだ！」

二ノはいたずら顔で言う、レンとアレスを促した。

「さ、出発〜！」

「美味しかったです」

レンは微かに頬に紅を散らしながら、礼を言った。

一方、アレスはそのやりとりをニヤニヤしながら見ていた。

レンとアレスはルークに案内され、離れにあるガラス細工の作業所にやって来た。中央にガラスを溶かすかまどがあり、陳列台には出来上がったばかりのガラスコップや花瓶や皿が所狭しと並んでいた。

その陳列台の片隅に、ガラス細工の置物が少し置かれている。レンは興味をひかれ真つ先に置物の方へと向かった。

近づいてみると、それらは先程見た物よりも更に美しく、魅力さえ感じられるものであった。

「あつ」

レンは、その中のある一つを見て声を出した。

それは、そこにあるどのガラス細工の置物よりも更に美しく、そしてとても細やかなものだった。

他のガラス細工は、花を模った物や、馬や物語の中でしかない動物などといった物だ。しかし、この美しく他のどれよりも細やかな作品は、一人の女性を模った物であった。

微笑みを浮かべながら、しなやかに舞っている女体が模られた作品。レンは暫し、それに魅せられていた。

「その作品の女、お前好みかあ？」

と、アレスは腕を組み、いやらしい笑みを浮かべてその作品とレン

を眺めた。

「っ、全然っ……」

平然なふりをして、一瞬その作品から目を離した。

そして、もう一度、レンの視線が女体に移った時だった。

作品の中の女性の口元が変形した。

「ん？」

レンは、食い入るようにガラス細工の中の女性を見つめた。笑みを浮かべていたはずの女性の口が閉じて、真顔でレンを見つめ返している。

「やつぱり、お前好みなんだろ」

レンの様子を見て、アレスがヘラヘラと笑う。

「おや？ そんな置物うちでは作った覚えがないがね」

ルークがレンの後から声をかける。

「……あっ」

レンがチラッとルークに視線を移し、もう一度ガラス細工に目を向けた時には、女性の笑みは元に戻っていた。

そのとき、レンは懐が熱くなるのを感じた。

「え？ なに？」

懐を探ると、なんと『虹色の翼』が微かに震え、熱を発しているのがわかった。

「なに……これ、どういう……」

不思議なことが、女神を象ったガラス細工にも起きている。

『虹色の翼』と同様に微かに震えだしたのだ。

女神の象は、小刻みに震えながらほのかに赤く光り出す。

「何だ？ 光ってるじゃないか」

アレスもようやくガラス細工の異変に気付く。

「離れてっ！」

レンはそう言って、後退し、腰にあるレイピアを構えた。と、同時にアレスも己の剣を抜いた。

レンは、久々にアレスの剣を見た。

以前よりも勇ましさを感じさせ、そして何より 血を沢山吸っていた。血液で汚れた剣。されど、勇ましさで中和されてしまう、そんな彼の剣に惹かれた。が、次第に轟音を発てて強く光っていく女神に、心を戻された。

#### 第四話（後書き）

しばらく更新できずに、すみませんm（――）m  
今回の執筆は、斎藤京享、董、春野天使、三竹和沙、零崎出識（五十音順）でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4862a/>

---

虹色の宝物

2010年12月18日17時30分発行